



痛み・しびれ治療の本質をついた教科書

評者 | 住谷昌彦 東京大学医学部附属病院 緩和ケア診療部／麻酔科・痛みセンター

痛み診療で伝統のある千葉大学において、痛み診療に関わるさまざまな診療科の多職種の先生方が、痛み・しびれに対して解剖や神経診察の解説に始まり、疾患ごとに典型症例を提示し、その診断・治療についての根拠を簡潔・明確に書かれた教科書である。「最前線」という書籍名のとおり幅広い論文が引用されており、平易な文章ながら学術的な価値も高い内容で、痛みを専門としない医療者から指導的立場にある医師まで、あらゆる人々のニーズに応える読み応えある面白い本であった。

国民の85%が腰痛を経験するなど、痛みはコモディティーズでありプライマリ・ケアの現場でも対応を求められることが多いが、これに対して解剖や画像所見を含めてわかりやすい図表が配置され、その項を見ただけで理解できるように工夫されている。

「心理的因子」への対応を論理的に解説

なかでも、日常診療で対応を誤ると医師・患者・患者家族すべてが不幸になる「心理的因子と痛み」についての項は、論理的で秀逸な内容である。しばしば学会や臨床の場において、患者の訴えを無制限に聞き、寄り添うことが正しい医療であると主張されることがある。これに対して、医師の傾聴が患者にとって報酬となり疼痛行動を強化するため、痛みに対して非適応的な患者行動については傾聴しないという治療介入について、症例を提示し明快な解説がなされている。もちろん患者が訴えている症状は、患者にとって確かに存在していることを理解し、その症状で困っていることを受け容れる姿勢は必要である。さらに、身体器質的原因が通常の医学検査で見つからないことだけで軽症であると判断したり、治療は必要ないと伝えたりすることは不適切であるということについても触れられている。「痛み記録」をつけるなど、患者やその家族の痛みと健康に対する誤った考え方や行動様式だけでなく（これに対して「痛みが気にならなかった記録」をつけることを勧めている）、医療者の態度も心理社会的な悪影響を与え、患者の怒りや劣等感を上乗せさせる結果となり、不快情動がさらに強くなり痛みが悪化するという悪循環モデルについても、具体例を示しながら理解を促す内容となっている。

プライマリ・ケアの先生方だけでなく、これから痛み診療を勉強しようという若い先生にも、まずこの本の一読を勧めたい。また、痛み診療を進めていくうえで困ったことがあった時に立ち返って読み返す価値のある、優れた「痛み・しびれ治療」の本質を突いた教科書と言えるだろう。

G



プライマリ・ケア臨床でみる 腰痛・手足しびれ 診療最前線

大島精司、折田純久＝編著

本体 4,200 円＋税
B5・216 頁／三輪書店／2019
[ISBN978-4-89590-653-1]